

考えを効果的に表現しようとする力を育成する授業を目指して

—視覚的工夫を用いた「書くこと」の学習過程を通して—

宮城県迫桜高等学校 遠藤 睦実

1 授業づくりに関わる課題

高等学校学習指導要領（平成30年告示）（以下新学習指導要領）解説国語編では、改訂の趣旨及び要点において、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」に関する指導の改善・充実として、「古典探究」を除く科目において〔思考力、判断力、表現力等〕に「書くこと」の領域を設け、文章を書く資質・能力の充実を図ることを示している。

自身の授業を振り返ると、多くの授業において、教材に依存した「読み取り」重視の授業、「書くこと」を「読むこと」の延長として捉えた授業を行っていたことから、「書くこと」の指導が十分できていなかった。そのため、生徒に「書くこと」の資質・能力を身に付けさせるに至っておらず、文章を書かせようとする消極的な反応が返ってくるのが少なくなかった。

次年度に迫る新学習指導要領による授業展開を考える上で、とりわけ「書くこと」の指導が不十分であるという自身の課題を踏まえ、効果的に書いて表現する資質・能力を育成すること、そして書いて表現する創作活動を楽しみと感じる授業を目指し、本研究に取り組むこととした。

2 研究の内容と方法

現在、所属校において1年次生の「国語総合」の古典分野を担当しているが、新学習指導要領における新設科目「言語文化」の中で古典教材を扱うことを念頭に置いて研究を行うこととした。

(1) 研究の内容

新学習指導要領では「書くこと」に関する指導の充実・改善が改訂の要点の一つとして示された。これまで古典分野において「書くこと」領域に取り組ませる機会がなかったことから、「言語文化」「書くこと」の指導事項に基づいた授業の研究を行い、自分の体験や思いを、効果的に表現しようとする力を育成することを目標に据え、研究の主題とした。

(2) 研究の方法

① 手立て1「学習過程」の明確化

新学習指導要領改訂の要点として「学習過程」の明確化、「考えの形成」の重視が示されている。このことから、書いて表現することを目指し、考えを形成して表現する過程を生徒に明示する。過程に沿って思考して表現することで、書く時にどこから手

を付けたらよいか分からないという状況を解消したい。

授業実践Ⅰでは「A書くこと(1)ア」の指導事項による「学習過程」（「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」）、授業実践Ⅱでは「(1)イ」の指導事項による「学習過程」（「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」「共有」）に基づいて各単元の学習を行うこととした。また、単元全体の活動に見通しを持たせ、自らの学習の調整が可能とするため生徒の実態を踏まえた教員の作成例を提示する。

② 手立て2「学習過程」における視覚的工夫

本研究では、文章創作のための材料（情報）、及び完成作品が読み手に伝わりやすくするための素材として、画像や書体等の視覚的工夫を用いることを手立ての一つとした。

I期の学習活動では、生徒が撮影した写真を視覚的工夫として用い、該当する全ての「学習過程」で活用した。自分の体験について深く思考することができるとともに、完成作品に取り込むことで読み手に伝わりやすくなる効果が期待できると考えた。

Ⅱ期では、写真は全ての「学習過程」で必要に応じて活用することとし、完成作品への貼り付けを自由とした。また、書いた文章の文字の大きさ、書体、背景の色等を工夫することが、生徒の作品世界を効果的に表現することの助けになると考え、視覚的工夫の必須事項として指示した。なお、文字の大きさや書体の取り扱いについては、中学校国語〔第3学年〕〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕(2)アでの既習となる。

なお、手立て1に挙げた教員の作成例の提示は「視覚的工夫」の具体を示す効果も意図している。

(3) 手立ての検証

本研究における手立てが「考えを効果的に表現しようとする力を育成する」ことに有効であったかを以下によって分析・検証する。

- ・研究、単元に関する意識調査
- ・学習ワークシート（生徒の自己評価、感想を含む）

(4) 授業実践

① 授業実践Ⅰ

『徒然草』に習って自分だけの随筆を書いてみよう
「言語文化」2内容〔思考力、判断力、表現力等〕A書くこと(1)アに基づく目標を設定し、言語活動として「随筆を書く」活動を行った。教材『徒然草』において兼好が人々に伝えたかったことを押さえつつ学習活動を行った。

② 授業実践Ⅱ

『伊勢物語』を読み、短歌を創作しよう

「言語文化」2内容〔思考力、判断力、表現力等〕A書くこと(1)イに基づく目標を設定し、言語活動として「短歌を創作する」活動を行った。教材に『伊勢物語』を設定し、短歌を創作するとともに、短歌を補足する文章（本単元では「詞書」と称して扱う）を添えた形で表現する学習活動を行った。

3 授業実践

(1) 授業実践Ⅰ

随筆の共通テーマを「私の日常」とし、「A書くこと(1)ア」の指導事項による「学習過程」である「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」に沿って学習活動を行った。その際、生徒の思考・表現の補助的役割として生徒が撮影した写真を活用し、題材を決める。随筆の情報源として写真を選び出し、写真から書き表したい情報を得て内容を検討した。決定した写真について班員に説明し、互いに質問し合うことで、表現したい内容を整理したり、深めたりしながら随筆執筆につなげた。随筆完成後は活用した写真を作品に取り込み、作品完成とした。

図1は完成した作品の具体である。この生徒は空に着目して写真を選び、随筆の題材を「空模様」と設定した。内容検討時には、班員に対して以下の点を説明した。

- ・7月のある日 放課後撮った写真
- ・いつものように空にカメラを向けた
- ・同じ日に撮った写真でもどんどん色が変わる
- ・同じような色や風景でも全く同じものはない

空と私の心情

七月のある日、いつものように部活をしていつものようにみんなで帰る準備をしていた。その時誰かが「今日の外綺麗だよ！」と言った。そして帰る時、みんなが追校ホールの外に出たらものすごく綺麗な空が広がっていた。その日は何故か気持ちが落ち込んでいたが、空を見た瞬間嫌なことやモヤモヤしていたことがすべて浄化されたような気がした。その後家に帰ってから空を見てみると色がだいぶ変わっていた。その時自分の心情とリンクしていることに気づいた。その日は偶然だと思うが、その空は自分を慰めてくれたような気がした。

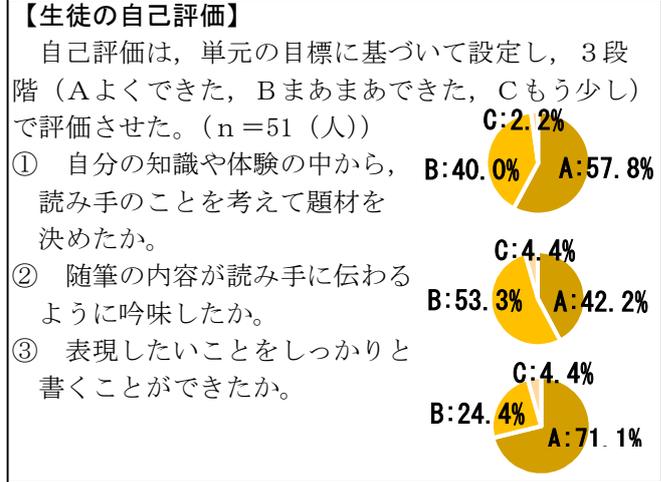


図1 生徒随筆作品（文字拡大）

この生徒の感想に「自分の伝えたいことが書けた。私の言葉選びが好きだと言ってもらえたので、相手に考えが伝わっていると思う。」とあり、自分の考えを効果的に書いて表現できた手応えを感じていることが読み取れる。

「学習過程」を進める中で「題材の設定」について、難なく設定できた生徒、苦戦する生徒と様々であった。後者への手立てとして、自分の日常を振り

返るために写真を見返し、興味のあるものや風景を新たに撮影することに加え、班員と会話をしながら情報を整理させたところ、題材を決めることができた。「学習過程」が「情報の収集」「内容の検討」と進むにつれ、班員と情報交換しながら活動していた。「学習過程」を明示して授業を進めることで、言語活動に流れが生まれ、何をすべきか、何について考えるべきかを理解して活動することができていた。



資料1 単元後の生徒の自己評価①

【生徒の感想】

- ・最初は自分で書けるかどうか不安だったけれど、始めると思っていたより楽しくて夢中になって書き進めてしまいました。
- ・写真を選んでから書いた方が書きやすい。
- ・読み手に伝わるように書くのは難しかった。

事後の自己評価や感想から、考えを形成して表現する過程に沿って思考したり、表現したりすることに戸惑いながらも、「学習過程」を理解して取り組もうという気持ちが読み取れた。一方、自己評価のグラフ②や感想から、読み手に伝わりやすく、効果的に表現することを難しいと感じている生徒が半数程度いることが分かった。

(2) 授業実践Ⅱ

Ⅱ期の実践では、短歌のテーマを「私の日常～高校生活～」として「学習過程」の「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」「共有」に基づいた学習活動を設定し、表現技法に「本歌取り」を取り入れることを指定した。「本歌取り」は本来、古歌の表現や雰囲気を取り入れるものであるが、生徒の実態から本単元では現代短歌を創作するため、現代の楽曲の歌詞や漫画のせりふなどを使用している。短歌創作に向けて題材、内容を検討した後、構成、展開、文体、描写等を手順にこだわらず、生徒が取り組みやすいところからワークシートに記入する形を取り、短歌の内容や表現について考えを深めたり、整理したりした。「記述」時に短歌の世界が読み手により伝わりやすいものとなるよう画像を取り入れたり、書体、背景の色彩を工夫したりすることも指示し、完成後に班で短歌を読み上げて紹介すること

で他の生徒と「共有」した。「共有」を受けて作品を捉え直し（「推敲」）、必要に応じて各自修正を行い完成に至った。

図2は完成した作品の具体である。この生徒は楽しく賑やかな高校生活を表すため、『夜に駆ける』の歌詞から本歌を取った。楽しい思い出の一つでもある文化祭の写真を貼付し、書体や背景も工夫した。



図2 生徒短歌作品（文字拡大）

班での「共有（作品紹介）」時、班員から「言葉の使い方が良い」「『駆け出す』が将来に向かって進んでいく様子を表している」といった感想があった。

また、図3は、言葉の表現にこだわった生徒のワークシートの一部である。短歌の内容が読み手に効果的に伝わるよう吟味している様子が見える。

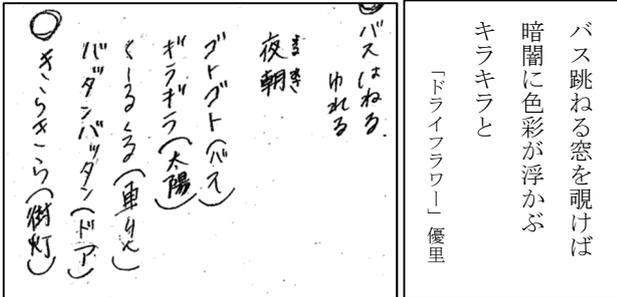


図3 生徒学習ワークシート、短歌作品（一部抜粋）

単元の序盤、短歌の題材や内容を挙げ、検討する活動に手が止まってしまう生徒が多かった。短歌として表現したいことが、うまく整理できなかつたことが要因と考えられたため、表現したい内容について補足する文をワークシートに書き出す活動を加えた。これによって考えを整理することができ、自分に引き寄せて考える助けとなった。「構成の検討」

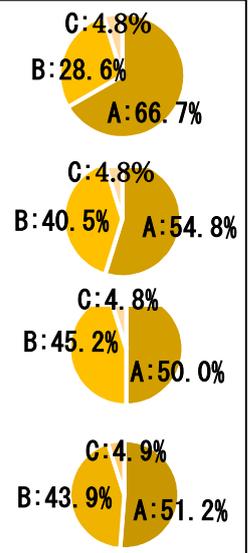
「考えの形成」「記述」の流れの中で生徒同士相談しながら進め、文書作成アプリケーションの操作を互いに教え合う場面も多くあった。「共有」「推敲」では、班内で作品を見せながら短歌を読み上げ、意図説明を行った。互いの作品に興味を持ち、積極的に感想や助言を伝え合っていた。それを基に作品を捉え直して修正する生徒の姿もあった。

【生徒の自己評価】

自己評価は、単元の目標に基づいて設定し、3段階（Aよくできた、Bまあまあできた、Cもう少し）

で評価した。（n=51（人））

- ① 本歌取りなど我が国の言語文化に特徴的な表現技法とその効果について理解できたか。
- ② 自分の体験や思いが効果的に伝わるよう、文章の種類、構成、展開、文体、描写、語句など表現の工夫をすることができたか。
- ③ 本単元の学習について見通しを持って取り組むことができたか。
- ④ 読み手を意識しながら作品全体を整えることができたか。



資料2 単元後の生徒の自己評価②

【生徒の感想】

- ・短歌を通して人に伝えることの楽しさが分かったような気がしました。
 - ・31音で読み手に思いを伝えるのが難しいということが分かった。
 - ・本歌取りが意外に難しく苦戦しましたが、自分の納得のいく短歌を作ることができた。擬態語と体言止めを取り入れて作ることができた。
- 授業実践Ⅰの生徒の感想では、読み手に伝わる表現を難しいとする記述が半数程度あったが、自己評価グラフ④や感想から授業実践Ⅱの活動においても難しさを感じながらも、読み手を意識して考えを効果的に表現して短歌を創作することを心掛けたことが読み取れた。

4 成果と課題

(1) 研究主題・副題に関する意識調査結果と考察

授業実践前後に本研究の主題と副題に関する意識調査を行い、以下の結果が得られた。

表1 研究主題・副題に関する意識調査結果

質問1 自分の考えを効果的に書いて表現すること（相手に伝わるように表現の工夫をして書くこと）を楽しみと感じますか。 A:楽しい, B:どちらかという楽しい, C:どちらかという楽しくない, D:楽しくない (n=51(人))				
	A	B	C	D
事前調査	14.9%	51.1%	29.8%	4.2%
事後調査	19.0%	50.0%	23.8%	7.1%
質問2 iPadを使うこと（画像を使ったり、背景や文字を工夫したりすること）は、思いや体験を伝える表現の助けになっていますか。 A:助けになっている, B:どちらかという助けになっている, C:どちらかという助けになっていない, D:助けになっていない (n=51(人))				
	A	B	C	D
事前調査	67.4%	28.3%	0.0%	4.3%
事後調査	63.4%	26.8%	7.3%	2.4%

質問1「自分の考えを効果的に書いて表現することを楽しみと感じますか」では、回答A、Bを合わせると授業実践前には66.0%、実践後では69.0%

であった。授業実践前後の回答に大差がなく、「楽しく感じる」回答に若干の上昇傾向が見られた。半数以上の生徒は、書くという表現活動を前向きに捉え続けていることが分かった。

質問2「画像を使ったり、背景や文字を工夫したりすることは、自分の表現の助けになっていますか」について90%超が肯定の回答であった。その理由として「言葉では伝えきれないことを画像やフォントで表現できるから」「見たものの美しさなど言葉で表現しにくいものを皆と共有できるから」等の意見があった。多くの生徒にとって「視覚的工夫」は、考えを形成し表現することの助けとなっていると見ることができる。一方、消極的な回答であるC、Dとした生徒が事前調査では4.3%であったのが、事後調査では9.7%となった。完成作品への視覚的工夫の指示については、授業実践Ⅰでは写真の貼り付けのみであったが、Ⅱ期では写真の貼り付けは自由としたものの、背景や書体、文字の大きさを工夫する等の作業が多くなってしまったため、生徒が対応しきれなかったことを反映していると考えられる。

(2) 授業実践における成果と課題(成果○, 課題●)

① 手立て1 「学習過程」の明確化

- 授業実践では、学習活動の見通しを持たせ、「考えを形成して表現する」ことを身に付けられるよう「学習過程」を黒板に示したり、学習ワークシートの構成に組み込んだりした。生徒は各過程の趣旨や概要を捉え、学習活動を進めることができている様子であった。
- 「学習過程」によって見通しを持ち、一つ一つ丁寧に進めたことで書くことに苦手意識を持っていた生徒の意欲の高まりが見られ、書くための材料をしっかりと準備して表現することができていた。
- 授業実践Ⅰにおいて、「内容の検討」で選んだ写真について班員に説明し、その内容をまとめることで思考の整理ができ、多くの生徒は順調に書くことができていた。
- 「学習過程」に沿って教員の取り組み例を示しながら授業を展開したが、それでも、考えたり表現したりすることが難しいと感じる生徒がいた。
- 授業実践Ⅱで、「学習過程」の「構成の検討」「考えの形成」「記述」を、短歌創作の特性上、更に細分化した項目を学習ワークシートに示し、生徒の考えやすい過程・項目から取り組むこととしたが、どこから考えたら良いのか迷ってしまう生徒が見受けられた。
- 授業実践Ⅱにおいて「学習過程」の明確化によって見通しを持ち、個々に作品完成に向けて学習活動を進めていくこととしたが、初めての短歌創作とあって活動に見通しが持てず予定していた時間を超過する生徒が多く、見通しの持たせ方に課題が残った。

② 手立て2 「学習過程」における視覚的工夫

- 表1質問2及び単元終了後の感想でも「写真を選んで書いたほうが書きやすい」「写真を撮影した時の状況や心情を思い出して書くことができた」など、この手立てに関して肯定的な感想が多かった。写真から情報を得ること、または写真やイラスト等の画像の貼付や背景や書体に手を加えることが、書き手の考えを深め、読み手に伝わりやすくする効果があるという点から有効性が高いと考えられる。
 - 授業実践Ⅰで、随筆を書く段階になって写真を変えたいという声があり、「情報の収集」「内容の検討」をやり直すこととなった。どの写真が自分の表現したいことにつながるのか、「内容の検討」の段階での吟味が不十分だったと考えられるものの、随筆をよりよいものにしようとする生徒の気持ちは大切にしたい。
 - この手立ての否定的な感想に「やるが増えてしまい、時間内に終わらない」「使い方が分からない」とするものもあり、普段スマートフォンを使用しているため順応は早いとはいえ、情報機器の操作指導を重ねる必要があると感じた。
- ### (3) 研究主題に関する成果と課題(成果○, 課題●)
- #### 「考えを効果的に表現しようとする力を育成する授業を目指して」
- 各単元の感想から「表現するのが難しかったけど、楽しかった」「今回はできなかったが次回は頑張りたい」という感想が見られたことに加え、表1質問1の結果では、考えを効果的に書いて表現することに対して約7割の生徒が肯定的な回答をしている。また、同表質問2の結果及び各単元の感想から、「学習過程」の各過程で視覚的工夫を取り入れたことが生徒の思考を深めたり広げたりするために有効であった。「学習過程」を理解し、視覚的工夫を用いたことで、書いて表現することへの意欲維持につながったと考える。
 - 手立て1、手立て2に共通する課題として時間の超過がある。根底に書くことの経験不足があることに加え、自分の内面を表現することへの躊躇もあり時間がかかってしまったと考える。生徒の感想にも読み手に伝わるような表現を使おうと思っても表現の仕方や、内容の深め方が分からないという記述があったことから、考えを効果的に書いて表現しようとする資質・能力を養う取組を継続して行っていきたい。

【図表等の承諾について】

図1～3は生徒が授業内で記入した作品及びワークシートの一部である。資料1・2は単元後の自己評価の一部である。生徒の感想は単元後の感想の一部である。表1は授業実践前後に行った意識調査の結果の一部である。それぞれ氏名を伏せて掲載することとし、生徒の保護者及び所属校校長から使用承諾を得た。